

第2期宮城県特別支援教育将来構想実施計画（前期）の取組状況について①

目 標	誰一人取り残さない学校づくり
事業名	学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業（実施計画施策番号38(主)、29(再)）
実施機関	特別支援教育課、高校教育課
取組内容	○学びの多様性を活かした教育プログラムの開発 ○発達障害理解研修会の実施
取組方針・達成目標	○県立高校と連携し、発達障害の可能性のある児童生徒の学びを支援するための教育プログラムの開発を行う。 また、教員を対象とした発達障害の可能性のある児童生徒の特性や指導法等についての研修会を行う。
令和7年度取組概要	○モデル校（岩出山高校）における授業実践、ワークショップ等を継続し、発達障害を研究している大学の研究機関と学びの多様性を活かした教育プログラムの開発を行う。 ○発達障害理解（基礎・中級）研修会を実施し、教員の発達障害への理解や指導力の向上を図る。

視察事業名	学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業【岩出山高等学校】	視察実施日	令和7年10月15日
意見・感想	<p>（1）取組内容について</p> <p>○昨年度実施した松山高校では、生徒だけでなく教員の意識もだいぶ変容したと聞いた。この事業は有効であると感じた。</p> <p>○今回は岩出山高校での1年目ということで、まずは教員がどのように理解して取り組んできたのか、苦勞している様子も伺えた。</p> <p>○今回の視察の時間で、松山高校での実践について説明があればよかったと思う。また、人間関係ができあがっている3年生ではなく、1・2年生の様子を視察できれば、より良い視察になったと思う。</p> <p>○3年生の授業を視察したが、どの生徒も明るく前向きにワークショップに参加していた。プログラムがしっかりとしていること、これまで継続した活動の成果が出ているものと感じた。</p> <p>○早稲田大学の本田先生やスタッフの支援はもとより、岩出山高校の教員がプログラムを共有・理解して子ども達のために取り組んでいる姿が素晴らしいと思った。この素晴らしい取り組みを全県に広めていただきたい。そのためには、多くの学校に授業を公開したり、岩出山高校の教員が他校の指導に当たったりと、今後の具体策が必要になると考える。せっかくの機会を生かしてもらいたい。</p> <p>○校長先生の話を伺い、外部講師と連携した継続的な研修、授業実践が現場で指導に当たる教員に変容をもたらしていることを知ることができた。</p> <p>○実際にSSTの授業実践を視察した際、一人も取り残されることなくグループ編成ができていることに感心した。相手のことを一生懸命考えて発言したり、なかなか発言できない生徒を応援したり、友達の力を借りたりしている姿を目にし、生徒たちの他者理解や人との関わり方にも変化をもたらしているように思った。</p> <p>○課題は、この取組をどう広げていくか、どう定着させていくかだと思う。モデル事業で終わらないことを願う。</p> <p>○特性は少なからず多くの人にあると思われ、障害のあるなしに限らず、自分の苦手な部分を声に出せることは大事だと思う。また、苦手な部分は自分だけだと考えの転換は難しく、それを友人が言い換える事で、本人の視野や捉え方も広がるのではないかと考えた。</p> <p>○保健師として就学前から関わりがあるが、今回のようなプログラムは小中学校からできるとよいと感じた。説明にもあったとおり、現場の教員は忙しく、理解も必要であり、理解を得るには大変な苦勞があると思われるが、少しずつでも推進して頂きたい。</p> <p>○学校全体、全職員で取り組める機会があるのはとても良いことだと感じた。</p> <p>○どの学校でも発達障害のある生徒への対応に苦慮しているので、この事業を通して理解を深め、知識を持った教員が増えることは、宮城県における人材育成の面においても非常に有益であると考えます。</p> <p>○今回視察した授業はSSTの授業であったが、生徒たちが自身のMIの結果をどのように受け止め、今回の授業に臨んでいたのか、教員側もMIに加え、KABCの結果を踏まえてどのような関わり方の工夫をしていたのかの事前の説明、若しくは授業後の振り返りの中で知ることができたらなお良かったと思う。</p> <p>○ソーシャルスキル教育ということで、初めに生徒たちがグループに分かれ自分の短所をあげ、それを他の生徒がポジティブな言葉に言い換える活動では、お互いを思いやりながら前向きな言葉を掛け合う姿が印象的で笑い声もあり、あたたかい雰囲気でも印象的であった。</p> <p>○このような活動を通して、生徒たちは自分を肯定的に受け止める力や、他者を尊重する姿勢を自然に身に付けていると感じた。また、ロボット役の生徒が障害物を感知すると危険信号を出し仲間が助けに行くという活動では、生徒同士が協力し合いながら支えあう関係性を体験的に学んでいたのも印象的であった。</p> <p>○「安心安全の環境づくり」がとても大切で、安心して学べる、安心して学校に通える環境づくりは特別支援教育だけでなく、全ての生徒たちに必要な活動であると感じた。</p> <p>○今回の取り組み内容の一つに、「教員を対象とした発達障害の可能性のある生徒の特性や、指導法についての研修」であったことを考えると、活動をサポートする立場の大学生のほかに、岩出山高校の教員も何名が参加していたので、実際にリードしながら体感する場面があり、今後に生かせるのではないかと感じた。</p> <p>○今後、教員が主体となって取り組まれることに期待したい。また、今回の実践に向けて、生徒の希望によりアセスメントを実施し、実態を把握して進められたことはとても大事なことだと思った。障害児の保護者の立場として、学校においてこのような取り組みが広く進められることをありがたく感じた。</p>		

(2) その他

○私の町も不登校の児童生徒が増加している。様々な要因があると考えられるが、発達障害を抱えて生きづらさを感じている児童生徒も少なからずいると思うので、本日のようなPAを計画的に取り入れることで、少しでも生きづらさが解消され、学校に来ることが辛くなるような環境を作ってあげたいと感じた。

(以下は質問です)

- ・UDLに基づく授業づくりについて、具体的にどのような点が変わったのか知りたい。
- ・大学の先生は義務教育にも横展開したいとの話であったが、ハードルは何か。
- ・松山高校の報告書はあるのか。あるのなら見てみたい。岩出山高校の1年目の報告は作成するのか。

○学校教育の中で、このような教育実践を通して他者理解や人間関係について学ぶことはとても大切なことと思う。学校教育は、子ども達の人間観、様々な分野・領域における価値観、コミュニケーションの力などの基盤を作る重要な場である。社会に出てからのつまづきやトラブルの要因の一つとして、「人との関わり」が問題となる例が非常に多いと思っており、今後の展望として、今回視察した取組について、次のことを期待している。

1. 義務教育の段階で、全ての学校で継続して実践すること。
2. 高校教育の中で行う場合、特別支援教育課に加えて、高校教育課も担当部署とすること。

○今回の視察では生徒と先生の距離も近く、SOSの出し方教育にも繋がっているように感じた。発達障害を持つ成人にも関わる事があるが、多くの方が生きにくさを抱え、自信喪失している方、反面自己効力感が高すぎてトラブルを抱える方もいる。大人になる前に自己認知が進み、苦手な部分への対処方法を自分の中に持っていることは大事だと思い、今回のプログラムを経験することで将来とても救われる方も多いと思う。

○子ども達に限らず、自然な関わりの中で生まれる考えや感情から得るものが大きいと思われ、作りすぎない環境で、だが意図した事は学んで貰いたいという加減の難しさを感じた。私自身、今回の視察は大変勉強になり、職場でも共有させて頂いた。

○私が高校で勤務していた当時も生徒の人間関係の重要性を感じ、新1年生の担任でMAPの研修を受け、入学後のオリエンテーションで実践したことを思い出した。

その時に生徒に伝えたかったのは受容する力であり、その取組を通して教員同士が共通認識を持つことができ、同じ目線で生徒に対応できたのは大きな副産物であった。

○今回のSSTの授業も、お互いの信頼関係を深めるいい活動だと思う。外部の指導者がファシリテートすることにより、活動の進め方のノウハウを教員が身に付け、日頃の活動に落とし込めれば良い。

○生徒のことを一番よく知っている教員が深い見立てを持ち、SSTをファシリテートできることを期待したい。

○保護者の立場として、今回視察した活動内容が年度初めの授業に取り入れられることを願う。

○高校生だけでなく、小学校低学年のうちから、他者を認めることや自分の短所は見方を変えれば長所にもなることを学び、相手を思いやる心を学んで欲しいと思う。それを根付かせるためには低学年からの学びが必要だと感じている。